

フィンランド語：重箱の隅⑫ 現象文

「フィンランド語との対話—吉田欣吾」

<https://yoshidakingo.com/>



参考資料

- ① Hakulinen, Auli, Maria Vilkuna, Riitta Korhonen, Vesa Koivisto, Tarja Riitta Heinonen ja Irja Alho. 2005. *Iso suomen kielioppi*. Suomalaisen kirjallisuuden seura. 847-862, 450-451. (*Ison suomen kieliopin verkkoversio*. [<https://scripta.kotus.fi/visk/etusivu.php>])
- ② Ikola, Osmo. 1972. ”Partitiivi subjektin, objektin ja predikatiivin sijana”. *Kielikello*. [<https://kielikello.fi/partitiivi-subjektin-objektin-ja-predikatiivin-sijana/>]
- ③ Helasvuo, Marja-Liisa & Tuomas Huumo. 2010. ”Mikä subjekti on?”. *Virittäjä*. 2/2010. 165-195. [<https://journal.fi/virittaja/article/view/4328/4042>]



特別な文のタイプ一覧 (1)

(「重箱の隅㊟」より)

特別な文のタイプ (1)			
文のタイプ		主題	
①	存在文 (Eksistentiaalilause)	Pöydällä	on kirjoja.
		机の上に	何冊か本がある
②	所有文 (Omistuslause)	Vaarilla	on saari.
		爺さんには	島がある
③	現象文 (Ilmiölause)	—	Syttyi sota.
		—	戦争が勃発した
④	状況文 (Tilalause)	Ulkona	sataa.
		外では	雨が降っている 

特別な文のタイプ一覧 (2)

(「重箱の隅⑨」より)

特別な文のタイプ (2)

文のタイプ		主題	
⑤	数量文 (Kvanttorilause)	Meitä	on kolme.
		我々は	3名だ
⑥	結果文 (Tuloslause)	Meistä	tulee kuuluisia.
		我々は	有名になる
⑦	感情使役文 (Tunnekausatiivilause)	Minua	pelottaa.
		私は	怖い
⑧	属格で始まる文 (Genetiivialkuinen lause)	Minun	täytyy mennä.
		私は	行かなければならない

現象文と状況文

- 「現象文」とは「存在文」の下位範疇だとも考えられるが、何らかの現象が発生することを表現するもの。ただし、とくに「状況文」との区別は必ずしも明確ではない
- 重要なことは文のタイプを区別できるようになることではなく、あくまでもさまざまなフィンランド語を理解できるようになること。
- ただし、分類について知ること、フィンランド語や言語というもののもつおもしろさを感じられるかもしれない。



現象文の基本的な形

- 現象文の基本形は「動詞 + 主語（名詞）」

On toinenkin vaihtoehto. 「別の選択肢もある」

Syttyi sota. 「戦争が勃発した」

- 現象文で使われる代表的動詞（≡ 存在文）

olla 「ある」, tulla 「来る」, löytyä 「見つかる」

syntyä 「生まれる」, kuulua 「聞こえる」

sattua ~ tapahtua 「起こる」, seurata 「続く」

vallita 「支配している、広がっている」



現象文の例文

Herää kysymys. 「疑問が生じる」

Ilmeni ongelmia. 「問題が明らかになった」

Tulee kolari. 「衝突事故が起こる」

Nousi myrsky. 「嵐が発生した」

Vallitsi hiljaisuus. 「静寂が覆っていた」

Kuului laukauksen ääni. 「発砲音が聞こえた」

Voi tapahtua mitä tahansa. 「何でも起こりうる」



現象文における主語

- 現象文では否定形になると動詞の後ろに来る語は分格になる（つまり、存在文や所有文と同じ）。そのため、この語は主語とみなされる。

Tuli **kolari**. 「衝突事故が起こった」

Ei tullut **kolaria**. 「衝突事故は起こらなかった」

- 存在文との最大の違いは主題（場所や時など）が明示されないこと。ただし、前後関係からわかる。



主題と評言（勝手な解釈）

- teema (theme 「主題、テーマ」)

文の主題 = 名詞 = ぶつう文頭に置かれる = 「既知」

- reema (rheme 「評言」)

主題に関する新たな情報 = 動詞を中心とする述部 = 「未知」

- 現象文では「評言」である動詞が文頭に置かれ、本来「既知」であるはずの「主題」を「未知」を置くべき位置に置く。そのため、現象文とは「主題」を強調し、何らかの現象が「ついに」「とうとう」あるいは「突然に」発生したのだといったことを強調するための文体とも思われる。

現象文の例文（再掲）

Syttyi sota. 「（ついに）戦争が勃発したのである」

Tuli kolari. 「（その結果）衝突事故が起こった」

Kuului laukauksen ääni. 「（突然）発砲音が聞こえた」

Voi tapahtua mitä tahansa. 「何でも起こりうるのだ」



次回以降の予告

- 「重箱の隅⑬」
「状況文」について整理していく予定。
- 「重箱の隅⑭」以降
「数量文」「結果文」「感情使役文」
「属格で始まる文」について検討する。

